

巻頭言

「半歩先を見る」

平成 24 年版「子ども・若者白書」の特集アンケートには、将来を見通せず不安を抱く若者像が映し出されています。就職、収入、年金に不安を持つ若者は実に 8 割を超えています。しかし、将来に敏感な若者だけが不安なのではありません。東日本大震災からの復旧・復興が進み始めたところへ欧州危機の深刻化が重なり、わが国経済並びに社会の先行きは却って不透明感を増しているようです。一方で、危機の度に地盤沈下を繰り返してきたわが国経済社会ですが、危機が明らかにする待ったなしの構造的課題を前にして、ようやく、将来を見据えた前向きの動きが取られつつあるように思われます。

本号のテーマは当社の事業パートナーである日本経済研究所のモットーである「半歩先行くパイロット・シンクタンク」から借用しました(日経研・安藤社長の寄稿を掲載、Theme 1「半歩先」)。「半歩先に行く」は当社の「起業」理念にも通じるところがあります。価値総研は時代の潮流を的確に読み、既成概念にとらわれない発想と新しい価値の創造により、お客様の課題解決を支援することを使命としてきました。「一步」ではなく「半歩」としているのは、当社も含めた調査・コンサルティング事業では現在の課題に対するソリューションを求められるからです。そこでは、現在のわれわれの意思決定、選択、実行が問われており、それら主体的な行動が「半歩先」を創り出すこととなります。

本号では当社研究員が見る「半歩先」を紹介しています。Theme 2「住民参加によるカフェ型ワークショップのススメ」は、地域住民の参加なくしては成功し得ない地域づくり活動における次世代の担い手を育成する手法を紹介しています。Theme 3「災害時の住宅確保と今後に関する課題」は、東日本大震災で応急仮設住宅として大きな役割を果たした民間賃貸住宅に焦点を当て今後の災害対策を考えています。Theme 4「市民マラソン開催による経済効果と今後の課題」は、ブームとなった都市型マラソンの経済効果を分析し、地域ブランドの確立、地域活性化へと繋げる要因を探っています。Theme 5「住宅における低炭素化の取り組み」は、低炭素化社会の実現に向けて期待されるスマートハウスの普及と課題を紹介しています。Theme 6「ケーブルテレビ業界の現状と他事業者とのアライアンスによる事業展開」は、事業環境、競争環境が大きく変化するケーブルテレビ業界の次の一手を探っています。また、「新・路地裏の経済学」では中国成長産業のこれまでと先行きが語られています。

ところで、こしばらくの世界経済の展開を振り返って見ても、先を見るのは容易ではありません。2007 年、サブプライム・ローンの焦げ付きが深刻化した折、これは住宅分野、しかも粗悪な融資に限定された問題であり、余り大きな影響は無いただろうと考えられていました。ところが、証券化商品に組み込まれ、レバレッジ取引により損失が拡大、リーマン・ブラザーズが破綻し、グローバル金融危機につながりました。日本の金融機関はこれら証券化商品を余り購入していないので、又もわが国経済への影響は限定的であると見られていました。ところが、金融収縮による世界不況で一番影響を受けたのは輸出大国・日本でした。1 年先、半年先が見通せていなかったということになります。

先を読む名人である羽生棋士は、①考え続けることができる力(これは問題発見力でもある)、②読み始めの段階で候補手を限定できる力(膨大な経験的知識に基づく絞り込み)、③一局面だけでなく、そこに至る流れの中での形勢判断力(大局観)、が重要であると語っています。これらは調査コンサルティング業務に必要な条件でもあります。正確かつ十分なデータ・情報を収集できること、論理的思考ができること、しっかりと現状分析を行うこと、豊富な実践経験を「使える知識」として蓄えていること、などです。株式市場の先行きを読むストラテジストもほぼ同様の指摘をしている(「ストラテジストにさよならを」広木隆)のは示唆的です。世界経済の展開を見誤ったのもこれら基本が欠けていたからではないでしょうか。

代表取締役社長 森 和之